

新発見の1891年作成のザサグト・ハン・アイマグ地図—— 清代ハルハ・モンゴルのアイマグ地図の典型

二木 博史

はじめに

1. 光緒 33 年地図

2. 光緒 17 年地図

おわりに

はじめに

清代においては、各地域の地図の作製は、政治上、軍事上、当該の地域を支配するための基本的な政策のひとつとみなされ、モンゴル地域の地図も各時代に多数えがかれた。通常、印刷された地図よりも手書きの地図のほうが、情報量がおおく、かつ各地域の特色をよく反映している。

本稿で検討するのは、最近発見された清代ハルハ・モンゴルの 4 アイマグ (行政単位) のひとつザサグト・ハン・アイマグ (*Zasagt khan aimag*) の一地図である。ザサグト・ハン・アイマグは、17 世紀のハルハ右翼に起源を有し、清の支配をうけたあとも、旧ザサグト・ハーンはザサグト・ハンの称号をあたえられ、権威を維持した。4 アイマグのなかでは、もっとも西に位置し、現在のゴビアルタイ県の全域、ザブハン、バヤンホンゴル両県の西半分、ホブド、オブス両県の東部、フブスグル県の南部、ウブルハンガイ県の西部に相当する。1923 年から 1931 年まではハンタイシル・オール・アイマグ (*Khan Taishir uul aimag*) とよばれた。

清代の文書史料のうち、ザサグト・ハン・アイマグのものは、現存するものが、きわめてすくないが、地図についても同様である。モンゴルの地名の歴史の変遷を研究している E. ラブダンは、各時代の地名を比較する資料として古地図を利用しているが、ザサグト・ハン・アイマグについては、清代の 2 ホショー (左翼後旗、中左翼左旗)、1 シャビ (ノモンハン・ホトグトの寺領) の適当な資料を入手できず、除外している¹⁾。なお、したでものべるが、日本の天理図書館には左翼後旗 (ジョノン・ザサグ旗) と中左翼左旗 (エレデネ・ドゥーレグチ王旗) の、モンゴル語・漢語表記の簡単な地図が所蔵されている。

地図資料のこのような状況から、清代のザサグト・ハン・アイマグ地図の重要性が理解されるであろう。

問題の地図 (*Jasaγtu qan ayimay-un arban yisün jasaγ qosiyu, γurban qutuγtu-yin šabinar-un egüride nutuylaqu nutuy-un jiruy*) は、光緒17年4月12日(1891年5月19日)に作成された手書きの地図で、2013年8月に筆者がオラーンバートルのアンティーク・ショップ「アマルバヤスガラント」にあるのを発見し、みせのオーナーのニャムフー氏の了承のもとにデジタルカメラで撮影した。そのご、上村明氏に再撮影を依頼し、より精度のたかい写真をえることができたので、本稿では、上村氏が撮影した写真を利用する(地図A参照)。ニャムフー、上村両氏に謝意を表すものである。

ザサグト・ハン・アイマグ地図としてこれまで、光緒33年12月(1908年1月)のものがよく知られている。ベルリン州立図書館に所蔵される同地図は、すでに1978年に出版されており、現在はネット上でも公開されている²⁾。なおベルリン・コレクションにはザサグト・ハン・アイマグの地図としてほかに、アイマグを構成する各ホショー(旗)の地図が13枚所蔵されているが、いずれも年代は明記されていない。

モンゴルのアイマグ地図をあつかった論考には、トゥシェート・ハン・アイマグ地図を対象とした井上治の研究(Inoue 2012)があるが、ザサグト・ハン・アイマグ地図をあつかった研究は、管見のかぎりでは、まだでていない。本稿では、まず光緒33年地図について整理し、そのあと光緒17年地図と比較して、後者の特徴をあきらかにするという方法をとる。現存のモンゴルの地図の圧倒的大部分はホショー(旗)の地図だが、ホショー地図とアイマグ地図の関係についても、本稿では検討する。さらに、モンゴル人の地理知識、景観認識にもとづく作図法がこの地図にどのように反映され、それは清朝の地図作成マニュアルとどのように関連しているのか、という問題もかんがえてみたい。

1. 光緒33年地図

うえでものべたように、ベルリン州立図書館には光緒33年12月12日(1908年1月15日)につくられたザサグト・ハン・アイマグ地図が所蔵されており、それは最初S. ザガスターによって記述され、そのあとW. ハイシツヒによって1978年に出版された³⁾。正式なタイトルは以下のとおりである。

Qalq-a-yin Jasaγtu qan ayimay-un arban yisün jasaγ qosiyu, qutuγtu nom-un qan nar-un γurban šabi-yin nutuy yaǰar oron-u bayidal tölöp-i Badarayultu törö-yin arban doloduyar on-du jiruy čese üiledcü Yeke jüryan, ǰangǰun quubi-yin sayid-ud tan-a tus tus medegülün kürgegüligsen-ü yosoγar nigen dörbeljün kemjiiyen-dür nigen jaγun yaǰar bolγan bodoǰu üiledügsen nutuy-un jiruy.

(ハルハのザサクト・ハン・アイマグの 19 ホショー、ホトグト・ノモンハンの 3 シャビの領地の状態について、光緒 17 年に地図と境界目録を作成し理藩院、将軍、参贊大臣にそれぞれ提出したやりかたを踏襲し、ひとつの方眼を 100 里と計算して作成した地図)

将軍とは、外モンゴルのハルハ地方西部のザサクト・ハン・アイマグとサインノヤン・アイマグを直接管轄したオリヤースタイ将軍をさす。通常、清朝からの命令は、理藩院経由でオリヤースタイ将軍に伝達され、各アイマグ (あるいは盟)、さらにアイマグを構成するホショーにつたえられた。清代後期のザサクト・ハン・アイマグは、世俗の領主 (ザサグすなわち旗長) が支配する 19 のホショー (旗) と聖職者たる 3 名の活仏 (ジャルハンズ・ホトグト、ヤルゴースン・ホトグト、ノモンハン・ホトグト) の支配する 3 シャビ領 (寺領) から構成されていた。

社会主義時代のモンゴルでごく少数部数が出版された地図帳におさめられたザサクト・ハン・アイマグ地図も光緒 33 年のものである。この地図帳は、もとの地図の写真に加工して地名に番号をふってあるが、ザサクト・ハン・アイマグ地図の場合、もとの地図がベルリン・コレクションのものなのか、モンゴルの機関に所蔵されていたものなのか、あきらかではない。いずれにせよ、この地図の最大の利用価値は、すべての地名に番号がふされ、キリル文字で表記してあることである。もとの地図は、いうまでもなくモンゴル文字で表記してあり、判読がむずかしい場合もあるので、キリル文字表記がおおいに参考になる。ベルリン・コレクションのザサクト・ハン・アイマグ地図は、基本的にすべての地名がハルトードによってローマ字転写され、*Mongolische Ortsnamen aus Mongolischen Manuskript-Karten* (1966) のなかに収録されているが、当該の地図のどの位置にその地名があるのかまでは記述していないので、利用がややむずかしい。これに対し、地図帳では地名に番号がふされているので、きわめて有用である。

光緒 33 年 9 月 17 日 (1907 年 10 月 19 日) につくられたサインノヤン・アイマグ地図がおなじ地図帳に収録されているが、そのタイトルは以下のとおりである。

Qalq-a-yin Sayin noyan ayimaγ-un qorin dörben qosıγu, jıγıγan qutuγtu-yin šabi-yin nutuγ, yaγar oron-u bayidal tölöb-i Badaraγultu törö-yin arban doloduγar on-du jıruγ čese üiledčü Yeke jıruγan, jangjun quubi-yin sayid-ud tan-a tus tus medegülün kürgegüligsen-ü yosoγar nigen dörbeljin kemjıyen-dür nigen jayun yaγar boljan bodoju üiledügisen nutuγ-un jıruγ.

(ハルハのサインノヤン・アイマグの 24 ホショー、6 ホトグトのシャビの領地の状態について、光緒 17 年に地図と境界目録を作成し理藩院、将軍、参贊大臣にそれぞれ提出したやりかたを踏襲し、ひとつの方眼を 100 里と計算して作成した地図)

両地図の名称は、文言が完全に一致しており、オリヤースタイ将軍の管轄したハルハ西部の 2 アイマグでは、同一のプロセスでアイマグ地図が作成されたことがわかる。すなわち清朝の文書行政が、清末まで十全に機能していたことを示すことができる。

奈良県の天理図書館には「扎薩克圖汗部落全圖」という表題をもつザサクト・ハン・アイマグ全図が所蔵されている⁴⁾。地図には作成の日付がかかれていないが、記録された領主たちのなまえが光緒33年地図と一致することから判断して、同地図をかきうつし、モンゴル語の地名に漢語を併記して作成したものとほぼ断定しうる。

天理図書館に所蔵されているモンゴル地図が、基本的にモンゴル語で作成された地図の漢語訳だということについては、すでに前稿（二木 2009）でのべたことがある。実はベルリンにあるザサクト・ハン・アイマグとサインノヤン・アイマグのホショー地図の大部分も、同様の特徴をもつ。ザサグト・ハン・アイマグの場合、ベルリン・コレクションには以下の13のホショー（旗）の地図が所蔵されているが、すべて地名がモンゴル語と漢語によって表記されている⁵⁾。なおカッコ内に独立後のあたらしい名称を Sonomdagva 1998 にもとづき併記し、さらに W.Heissig 作成の目録の番号を付した。

1. 喀尔喀西路中右翼左旗鎮國公銜扎薩克台吉瑪呢巴雅尔旗游牧圖（ダルハン公旗）No.689.
2. 喀尔喀西路左翼左旗扎薩克台吉扎勒沁棍布車登旗游牧圖（サルトル・セツェン王旗）No.690.
3. 喀尔喀西路左翼前旗副將軍扎薩克輔國公羅布桑端多布旗游牧圖（チン・アチト王旗）No.691.
4. 喀尔喀西路左翼後末旗公銜扎薩克台吉阿克旺車林旗游牧圖（ゾリグト・ザサグ旗）No.692.
5. 喀尔喀西路中左翼末旗扎薩克台吉車登多尔濟旗游牧圖（アハイ・ベイセ旗）No.693.
6. 喀尔喀西路右翼右末旗扎薩克輔國公巴扎尔喇克察旗游牧圖（ダライ公旗）No.694.
7. 喀尔喀西路中左翼右旗扎薩克輔國公巴彦濟尔噶勒旗游牧圖（メルゲン公旗）No.695.
8. 扎薩克圖汗部右路中右翼末旗鎮國公銜扎薩克台吉達木党阿畢沙旗游牧圖（ツォグトイ・ザサグ旗）No.696
9. 喀尔喀西路右翼後旗鎮國公銜扎薩克台吉巴扎尔巴呢旗游牧圖（バートル・ベイセ旗）No.697.
10. 扎薩克圖汗部落兼輝特扎薩克台吉薩達巴濟党蘇倫扎布旗游牧圖（スジグト公旗）No.698.
11. 喀尔喀西路右翼前旗扎薩克台吉車林多尔濟旗游牧圖（ヨスト・ザサグ旗）No.699.
12. 喀尔喀西路右翼後末旗扎薩克頭等台吉多普多尔濟旗游牧圖（ビシレルト・ザサグ旗）No.700.
13. 喀尔喀西路中右翼末旗輔國公扎勒沁棍布多尔濟旗游牧圖（ダイチン・ベイセ旗）No.701.

つぎに天理図書館に所蔵されているザサグト・ハン・アイマグの 6 ホショーの地図は、以下のとおりである⁶⁾。

14. 喀尔喀西路右翼左 [旗] 扎薩克副盟長額尔德呢畢什圪勒圖扎薩克圖 [汗] 索特那木拉布坦旗游牧圖 (ザサグト・ハン旗)
15. 喀尔喀西路左翼後旗扎薩克離任貝子蘊端多尔濟旗游牧圖 (ジョノン・ザサグ旗)
16. 喀尔喀西路左翼右旗扎薩克鎮國公蘇克蘇倫旗游牧圖 (エルデネ・ベイセ旗)
17. 喀尔喀西路中左翼左旗盟長郡王銜扎薩克多羅貝勒阿尔達薩嘎喇旗游牧圖 (エルデネ・ドゥーレグチ王旗)
18. 喀尔喀西路左翼中旗扎薩克鎮國公達木党蘇倫旗游牧圖 (ウイゼン公旗)
19. 喀尔喀西路右翼右 [旗] 扎薩克公棍布蘇倫旗游牧圖 (イルデン・ザサグ旗)

上記のふたつの図書館に所蔵されているホショー地図は、そのタイトルのあらわしかた、2 言語 (漢語、モンゴル語) による表記、印と日付の欠如、といった形式が完全に一致しており、かつ相互に重複はなく、ふたつのコレクションの地図をあわせるとザサグト・ハン・アイマグの全 19 ホショーの地図がそろふ。このことは、これらの地図がもとはひとつのセットであったのが、一部はドイツにはこぼれ、のこりは日本にもたらされたことをものがたっている。

これらの地図はある時期に同時につくられたとかがえられるが、どのようなプロセスで作成されたのだろうか? Sonomdagva 1998, Bao Guiqin 1995 にもとづき、各ホショーの領主 (ザサグ) の在位年代をしらべると、以下のようになる。

1. Manibaĵar: 1900–1917.
2. Ĵalĉingyomboĉedeng: 1902–1923.
3. Lubsangdondob: 1876–1908.
4. Agvangĉerin⁷⁾: 1879–1922.
5. Ĉedengdorĵi: 1905–1923.
6. Baĵiraragĉa: 1886–1915.
7. Bayanĵiryal: 1878–1922.
8. Damingabisa: 1895–1922.
9. Baĵarbani: 1889–?
10. Sadibaĵidangŝürünĵab: 1900–1912.
11. Ĉerindorĵi: 1880–1910.
12. Tobdorĵi: 1899–1913.
13. Ĵalĉinggombodorĵi: 1903–1923.

14. Sodnamrabdan: ?-1909.
15. Yüdündorji: 1889-1910.
16. Sügsürün: 1897-?⁸⁾
17. Artasagara: 1885-1908.
18. Damdingsürting: 1886-1915.
19. Гомбосүрүнг: 1898-1923.

領主たちの在位年代から判断して、これらの地図がツェデンドルジ (No. 5) がザサグ (旗長) に任命された1905年と、詩人としてモンゴル文学史上なだかいロブサンドンドブ (No. 3) と盟長アルタサガラ (No. 17) 両名の没年の1908年のあいだにつくられたのは確実である。

つぎにホショー地図とアイマク地図の関係をかんがえてみたい。いうまでもなく、まずホショー地図が作成され、つぎにそれらを利用してアイマク地図がつくられたはずだ。ホショー地図もアイマク地図も清政府の命令で作成され提出されたが、アイマク地図の具体的な作成方法についての指示の文書は、筆者はまだみていない。一般的にかんがえられるのは2種類あり、ひとつはホショー地図、シャビ (寺領) 地図を文字どおりつなぎあわせてアイマク地図を作成する方法であり、モンゴル国立図書館所蔵の布にえがかれたサインノヤン・アイマク地図はこのような方法でつくられたとかんがえられる。この方法で作成すると、当然のことながら、地図のサイズは巨大になる。もうひとつの方法は、ホショー、シャビの地図を参考にしながら1枚のアイマク地図を作製する方法である。

実は、うえでのべたベルリンと天理にある19枚のザサクト・ハン・アイマクの各ホショーの地図は、方眼との位置関係もふくめ、光緒33年のザサクト・ハン・アイマク地図の各部分部分とほぼ完全に一致する。それでは、光緒33年のザサクト・ハン・アイマク地図は、全ホショー (旗)、シャビ (寺領) の地図をあわせてつくられ、ホショー地図はのちにその漢語併記版がつくられたのかというと、そうではなく、逆の方法で、すなわちアイマク地図の各部分をきりはなしてモンゴル語・漢語表記の地図を作成したのは、ほぼまちがいないとおもわれる。この推定は光緒33年に作成された中右翼末旗 (独立後はツォグトイ・ザサグ旗) の地図の精査によって支持される。

たいへんおどろくべきことだが、清代ザサクト・ハン・アイマクのホショー (旗) のモンゴル語による地図は、モンゴル国立図書館所蔵の光緒33年の中右翼末旗の地図以外確認されない。すなわちモンゴル国立図書館にもモンゴル国立中央文書館にもベルリンにもほかに1枚もないようである。この中右翼末旗の地図には、「光緒33年に作成し理藩部に一部送付したあとにのこった地図」 (*Badarayultu törö-yin yučin yurbaduyar on-du üiledcii Yeke Jürjan-u yaĵar-a nigen*

qubi-yi yabuyluyad üligsen jiruy ene amui)⁹⁾ というかきこみがあり、正式に作成され提出された地図の副本だということがわかる。なおコトビッチ・コレクションにもまったくおなじ中右翼末旗地図のうつしがいっているという¹⁰⁾。コトビッチが地図を収集した 1910 年代にすでにザサクト・ハン・アイマグのホショー地図はこれしかのこされていなかったのかもしれない。

光緒 33 年のザサクト・ハン・アイマグ地図のなかの中右翼末旗の部分と、おなじ光緒 33 年の中右翼末旗地図を比較すると、そのかたちがまったくちがう。このホショーの景観を特徴づけているテルメン湖やオイゴン湖などの湖のかたちとおおきさもことなる。また地名の数が、次節で具体的にのべるように、中右翼末旗地図のほうが「アイマグ地図の中右翼末旗の部分」よりも圧倒的に多い。さらに方眼と地図の位置関係が、アイマグ地図と中右翼末旗地図では完全にちがう。これらの事実によって、ザサクト・ハン・アイマグ地図が各ホショー地図をあわせてつくった可能性はほぼ否定される。

以上を要するに、ベルリン州立図書館と天理図書館に所蔵されている計 19 枚のホショー地図は 1905 年から 1908 年のあいだにつくられたこと、19 枚の地図が光緒 33 年地図の各ホショーの部分に完全に一致することをかんがえあわせると、これらホショー地図が光緒 33 年のアイマグ地図をもとに作製されたことは、うたがない。

20 世紀のはじめに、それまでのおおはばな自治をみとめる政策を変更し、モンゴル地域を開発の対象とするあたらしい政策「新政」を実施するなかで、清政府がおそらくは実務用に、漢語をふくむ各ホショーの地図を作成するさいに、光緒 33 年の地図を基準にして、それを分割する方法でつくったという事実をここでは確認しておきたい。

なおベルリン州立図書館に 4 枚、天理図書館に 7 枚所蔵されているサインノヤン・アイマグの諸ホショーの地図もおそらくは、ザサクト・ハン・アイマグの場合と同様、出所はおなじで、かつ光緒 33 年のアイマグ地図を分割する方法で作製されたと推定される。

2. 光緒 17 年地図

すでにのべたように、光緒 17 年地図は、公的機関ではなく、個人が所蔵していたため、これまで知られていなかったのだとおもわれる。ただ、その存在は、光緒 33 年地図のタイトルのなかに「光緒 17 年に地図と境界目録を作成」と明記されていることから、当然予想されていた。なお、近刊の *Mongolchuud: XVII-XX zuuny ekhen, Zuragt tüükh* には“*Khalkhyn Zasagt khan aimgiin zurag. 1892 on*” というタイトルで 1 枚のザサクト・ハン・アイマグ地図が掲載されているが¹¹⁾、これはあきらかに、うえでのべた 1986 年刊の地図帳にのっている光緒 33 年作成の地図を転載したものだ。同地図のタイトルのなかの「光緒 17 年に地図と境界目録を作成」という表現にひかれて光緒 17 年 (1891 年) の地図と誤解し、しかも西暦になおすとき

に計算をあやまって1892年としてしまったのである。

新発見の地図はサイズがおよそタテ145センチ、ヨコ125センチで、光緒33年のものとおおきさはそれほどかわらない。すこしインクよごれがあるが、保存状態は概して良好である。光緒33年の中右翼末旗地図と同様に印を欠き、同ホショー地図とおなじように、提出用の正式な地図ではなく、役所に副本としてのこしておいた地図だとおもわれる。

光緒33年地図と比較してすぐに気づくことは、かきこまれた地名のかずが圧倒的におおく、地形がきわめて精密に丁寧な、たかい技術でえがかれ、うつくしい絵図になっていることだ。

まず記録された地名の数について中右翼末旗を例に比較してみると、光緒33年のアイマグ地図では35であるのに対し、光緒17年のアイマグ地図では100以上をかぞえることができ、情報量がおよそ3倍である。光緒33年の中右翼末旗地図には125の地名が記録されているので、光緒17年のアイマグ地図の精度が相当にたかく、いまはつたわっていない光緒17年作成の各ホショー地図の情報アイマグ地図一枚に凝縮されてほぼのこっているのではないかと推定され、本地図の資料的価値がきわめてたかいことがわかる。ちなみにE. ラブダンの記述によれば、1915年の同ホショーの地図には130の地名、1921年の地図には143の地名がかきこまれているというので¹²⁾、同旗を事例に地理知識の記録のされかたの変化を調査することが可能である。

光緒17年にモンゴル各地域の地図があらたにつくられたのは、清朝政府の政策と直接関係がある。上村明が指摘しているように、会典をあらたに編纂する事業がはじまり「会典図」作成のための基礎資料として、地図の作成の指示がだされた¹³⁾。「光緒会典輿図」編纂の背景には、康熙帝の時代に「皇輿全覽図」作成のために全国で測図をして以来百数十年が経過し、その間に行政区画が変化し、おおくの地図が戦乱でうしなわれてしまったことなどがあった¹⁴⁾。

ザサグト・ハン・アイマグに隣接するホブド地方にも当時、あらたに地図作成の命令がたえられ、実際に地図がつくられた。その地図には「光緒16年の、あらたに地図を作成して提出し会典 [qauli bičig] にくみいれるようにという命令のもとづき、われらホブドに所属する諸ホショーの貴族・官員はみなホブドの地にあつまり、それぞれの管轄する地域の地図、所管の官衙の地図をてらしあわせ、1枚のあたらしい精密な地図 [sin-e narin jiruy] をえがき、会典館 [qauli bičig-ün küriy-e] に送付したが、その地図のうつしをそれぞれ保管した」¹⁵⁾と記載されている。同様の命令がザサグト・ハン・アイマグにもだされ、「あたらしい精密な地図」が作成されたのは、うたがない。このときの地図作製は、いわば国家プロジェクトとしてすすめられ、モンゴル西部の支配者たちもそのことをよく理解し、くわしい地図を中央に提出したのだとおもわれる。

光緒25年に完成した『欽定大清會典圖』全270巻のなかで地図の部分「輿地」は、第139巻から270巻までの132巻であり、ザサグト・ハン・アイマグ地図は、第268巻（輿地130）に

「喀爾喀札薩克必拉色欽畢都里雅諾爾盟游牧圖」として 9 枚に分割されておさめられている¹⁶⁾。この地図は基本的に山と川と湖のみをえがき、少数の地名をかきいれたきわめて簡略化された地図で、モンゴル語で作成された原図（光緒 17 年地図）とくらべると、精度がいちじるしくひくい。なお、『欽定大清會典圖』で盟の名称が一貫して「札薩克必拉色欽畢都里雅諾爾盟」となっているのはもちろんあやまりで、「薩」をとって「札克必拉色欽畢都里雅諾爾盟」としななければならない。これはザサグト・ハン・アイマグの会盟の場所であった *Jay yool-un eki Bindüriy-a nayur*（ザグ河の源流のビンデリヤ湖）を表記したもののだが、「必拉」「色欽」はそれぞれマンジュ語の普通名詞である *bira*（河）、*sekiyen*（源流）の音写なので、かなり奇妙な名称である。光緒 17 年刊の『欽定理藩院則例』では、会盟の場所が「扎克河源畢都哩雅諾爾」¹⁷⁾と、より適切に表記されている。現在は *Binderiya khökh nuur* とよばれるこの湖は、サインノヤン・アイマグ内に位置していたので、ザサグト・ハン・アイマグ地図にはなまえがでてこない。

「会典圖」編纂の過程で、地図のかきかたを指示したマニュアル「画図各式」が光緒 15 年（1889 年）と 17 年（1891 年）につくられている¹⁸⁾。前者のモンゴル語版の日付は光緒 16 年閏 2 月 22 日（1890 年 4 月 11 日）である¹⁹⁾。同マニュアルには山や川や町などのえがきかたの凡例が具体的にしめされている。凡例では、哨所（国境警備処）の記号として“×”をつかうべきとされているが、光緒 17 年のザサグト・ハン・アイマグ地図でもそれがまもられている。オボー（境界標識）の記号も同様である。駅通については、規定では、“△”だが、光緒 17 年地図では“○”がつかわれている。二度めのマニュアルによれば、緯度経度の測定がのぞましいとされたが、モンゴル地方では実行されなかった。もっともザサグト・ハン・アイマグ地図の場合、その作成の日付（光緒 17 年 4 月）から判断して、二回めのマニュアルは考慮する必要がないとおもわれる。

同地図を特徴づけている山岳や河川、湖については、すでにモンゴル地域で確立されていた方法にのっとり、えがかれたとおもわれる。ザサクト・ハン・アイマグ地域を特徴づけている景観は、南部のアルタイ山脈、西部のソタイ山、ハルオス湖、ハル湖などであるが、これらは類型化されて描写されているとはいえ、圧倒的な量感やあざやかな色彩が強烈な印象をあたえる。モンゴルの絵図は、それぞれが個性をもっている場合がおおいが、光緒 17 年地図は、絵図としての完成度がきわめてたく、どのような絵図師によってえがかれたのか、興味がひかれる。

光緒 33 年地図では、山は大部分、南から北をみる視点でえがかれているのに対し、光緒 17 年地図では、複数の視点が混在しているため、山はさまざまな方向からえがかれている。複数の視点といっても、基本的に①中心から周辺をみる視点、②南から北をみる視点、③東から西をみる視点、これら 3 種類に整理できる。アイマグ地図はホショー地図をくみあわせる方法で

つくられるので、もとのホショー地図で山が「中心から周辺をみる視点」でかかれていた場合は、そのまま踏襲されたとかんがえるのが自然だ。また光緒17年地図は、北をうえの方向にしてえがいているので、「南から北をみる視点」が多用されるのも理解しやすい。興味ぶかいのは、西から東の方向をみて山をえがいた事例はきわめてすくないのに、「東から西をみる視点」でえがいた山のかずがかなりおおいことで、この地図のおおきな特徴になっている(地図B参照)。これはザサグト・ハン・アイマグの人々の方向認識とかかわっているのかもしれない²⁰⁾。

光緒33年の地図になくて、光緒17年の地図にのみみられるもののひとつは、耕地である。「耕地」(*tariy-a*)とのみ記載されているものと、「まずしいモンゴル人が生活を維持するための耕地」(*yadayu mongyolčud ami uljiqu tariy-a*)とかかれていたものの2種類がみられる。計23カ所の耕地の所在地をしたの表にしめした。耕地のおおくはアルタイ山脈の北側に分布していた。

ホショーまたは寺領	「耕地」のかず	「まずしいモンゴル人が生活を維持するための耕地」のかず	計
ザサグト・ハン旗	1	2	3
ホイト旗 (スジグト公旗)	7	1	8
中右翼末旗 (ダイチン・ベイセ旗)	2	2	4
右翼前旗 (ヨスト・ザサグ旗)	3	0	3
左翼中旗 (ウイゼン公旗)	1	0	1
左翼右旗 (エルデネ・ベイセ旗)	0	3	3
ノモンハン・ホトグト領	1	0	1
総計	15	8	23

光緒17年地図がつくられた8年後の1899年にロシアのコズロフ探検隊がザサグト・ハン・アイマグを通過し、農地についての記述をのこしている。それによると当時、中右翼末旗(ダイチン・ベイセ旗)のウグームル(*Ugumyr*)では10張の天幕にすむモンゴル人が4年輪作でコムギやオオムギをつくっていた。播種は(ロシア暦の)4月、収穫は9月の後半で、収穫量は播種量の15~25倍だった。月に一回の灌漑が良好な収穫をうんだ²¹⁾。ウグームル溪谷(*Ögöömöriin tal*)は、現在はゴビアルタイ県トゥグルグ郡にふくまれる。光緒17年地図で中右翼末旗のトゥグルグ河のちかくにえがかれた「耕地」(*tariy-a*)は、このウグームルの耕地をさしているのだとおもわれる。

1920、30年代にモンゴルで体系的な調査をおこなったソ連の地理学者シムコフは、(ゴビアルタイをふくむ)ザブハン県の代表的な耕地として、シャルガ河とビゲル川の溪谷をあげている²²⁾。光緒17年地図で耕地がもっともおおく分布しているホイト旗の耕地の大部分はシャルガ溪谷にあり、ノモンハン・ホトグト領の耕地はビゲル溪谷につくられたので、シムコフの記述とよく合致している。なおシャルガ溪谷には「ザグ・オボーのくさかり場」(*Jay-yin*

oboyan-u qadalang) があつたことが、光緒 17 年地図に記録されている。

モンゴルの代表的な歴史地理学者プレブは、清末にトゥシェート・ハン・アイマグの右翼左旗(エルデネ王ホショー)に「モンゴル人が生活を維持するためにたがやす」(*Mongolchuud ami uljin taridag*)土地があつたことを指摘し、それらが牧畜よりも農業によって生活をささえるまずしいモンゴル人によって耕作されたと説明している²³⁾。まったくおなじ表現がつかわれていることから判断して、本地図に記録されている「まずしいモンゴル人が生活を維持するための耕地」(*yadayu mongyolčud ami uljiqu tariy-a*)も、おなじ性格の耕地と理解すべきであろう。すなわち本地図は、19 世紀すえにおけるモンゴル人牧畜民の貧困化を記録した貴重な資料ということになる。プレブが作成したザサグト・ハン・アイマグの耕地の一覧には、光緒 17 年当時もっとも耕地のおおかつたホイト旗が記載されていないので、本地図はモンゴル農業史の資料としても有用である²⁴⁾。

寺院の名称を正確に記録しているのも、光緒 17 年地図の特徴である。左翼後旗(ジョノン・ザサグ旗)にある寺院について、光緒 33 年地図は単に「寺院」(*qural-un küriy-e*)とのみしているが、光緒 17 年地図ではアマルバヤスガラン寺院(*Amurbayasqulang süm-e*)となっている。文献からはこのなまえは確認されないが、その位置からかながえて、現在のバヤンホンゴル県バヤンウンドゥル郡にあつたアマルボヤント寺院(*Amarbuyant khiid*)をさすとかながえられる。康熙 36 年(1697 年)創建のモンゴル南西部を代表する大寺院で、最盛時には 1500 名以上の僧侶を擁したという²⁵⁾。なお 1926 年に作成されたザサクト・ハン・アイマグ地図(モンゴル国立図書館所蔵)では、おなじ寺院が *Amuyulang-i qamayalayči süm-e* というなまえで記録されている。この名称も文献からは確認されない。いずれにせよ、同一の寺院が複数のなまえでよばれていたことがわかるのであり、1930 年代の大粛清によって寺院が破壊され、おおくの資料がうしなわれたモンゴル仏教の歴史を再構成するのに過去の地図が基本的な資料になりうることをしめしている。

ヤルゴーサン・ホトグト領にあつた寺院についても、光緒 33 年地図では単に寺院(*qural-un küriy-e*)とされているのが、光緒 17 年地図では、*Qoldakin-i toytayayči süm-e* という正式名称がかかっている。本寺院は最初 1811 年、3 世ヤルゴーサン・ホトグト・ロブサンダンバダルジャーによってイデル河のちかくに建立され、勅令で *Qoldakin-i toytayayči süm-e* のなまえを獲得し、1876 年に正式に寺領が清朝により承認された²⁶⁾。

寺院の存在をできるだけ正確に記録しておこうという意識が光緒 17 年の地図を作成したひとびとのあいだには、つよかつたとおもわれる。中左翼左旗(エルデネ・ドゥーレグチ王旗)の例でいうと、光緒 33 年のアイマグ地図には 1 カ所の寺院しかみられないが、光緒 17 年地図には 4 カ所の寺院がえがかれている。中右翼末旗(ツォグトイ・ザサグ旗)の場合も、光緒

33年アイマグ地図には寺院が1カ所のみしかえがかれていないのに対し、光緒17年アイマグ地図ではふたつの寺院が記録されている。うえで言及した光緒33年の中右翼末旗(ツォグトイ・ザサグ旗)地図では、2カ所の寺院が記載されているので、同年のアイマグ地図では簡略化されて1カ所のみ記録されていることがわかる。

当時は右翼前旗(ヨスト・ザサグ旗)に属し、1911年のモンゴル独立後に独自のホショーがつくられた地域については、光緒17年地図に *güing Gončuyjab-yin sayuysan yajar* 「公ゴンチグジャブの居所」がかきこまれている。非ザサグ(非旗長)のゴンチグジャブ(在位1859-1896)の爵位は輔国公で、そのむすこのダシツェレン(在位1896-1923)が1912年に、イトゲムジト・ザサグ旗の領主として認定され、ザサグト・ハン・アイマグのホショーのかずが20にふえる。なおザサグト・ハン旗のタイシル山脈(*Tayıšir nirayu*)の南、*Buyan-i jalbirayči süm-e*という寺院の西にも *güing Serning-yin sayuysan yajar* (公セルネンの居所)という記載がみられる。ザサグト・ハン旗には、輔国公の爵位を有する非ザサグの貴族が居住していたことが確認され、包桂芹はその第4代まで記録しているので(Bao Guiqin 1995: 660)、その子孫であろうか？

最後に光緒17年地図と、光緒33年地図以外のその他のザサグト・ハン・アイマグ地図について、簡単に整理しておきたい。モンゴル国立図書館に所蔵されている1922年作成の地図をわたしは直接みていないが、アルタンザヤーは「光緒33年地図とおなじようにえがいた」とのべている²⁷⁾。

国際シンポジウム「モンゴル人と地図」(2014年8月21、22日、モンゴル科学アカデミー会議場)のための特別展がモンゴル国立図書館で開催され(8月22日18～19時)、2枚のザサグト・ハン・アイマグ地図も展示された。時間が制約されていたので、十分に調査することはできなかったが、1枚は布にえがかれた1914年制作の、かなり簡単な地図であった。国立図書館のマニュスクリプト目録に *Khan Taishir uulyн chuulgany 20 zasag khoshuu, 3 khutagtyn shaviin nutaglasan gazar ornyг khuraanguilan üildsen zurag, Olnoo örgögdsönii 4 dügeer on* (1914), 1351/96²⁸⁾として分類されている地図とおもわれる。

もう1枚は、1926年10月8日の日付をもつ地図で、正式のタイトルや請求番号は不明である。この地図は一見したところ、光緒17年地図にきわめてちかく、同地図にもとづいて作成したのではないかという印象をもった。それは、たとえば、耕地の位置をえがいている点、ソタイ山にみなもとを發するよつつの河川の名称を記録している点、ハルオス湖をハルオス・ダライと表記しアグバチ山(*Agbači ayula*)、チョノ・ハラيف(*čino-a qarayıqu*)川のなまえをみずうみのなかにするしている点などにあらわれている。

おわりに

本稿でとりあげた光緒 17 年 (1891 年) のザサグト・ハン・アイマグ地図は、「会典輿図」を編纂するための基礎作業として、清朝が全国で測地をさせ、北京におくらせた地図の副本であり、おそらくは 19 世紀以前の同アイマグの手描きの地図としては唯一、今日までつたえられたものである。

もともとは、まずアイマグを構成するホショー (旗)、シャビ (寺領) ごとの地図が作成され、それにもとづいて 1 枚のアイマグ地図がつけられたとかがえられる。これまでよくしられていた光緒 33 年 (1908 年) 地図にくらべ、光緒 17 年地図はその精度がきわめてたかく、いまはうしなわれてしまった各ホショー、シャビの地図を復元しうる貴重な史料といえよう。このようなくわしいアイマグ地図がつけられた要因としては、清朝の指示が重視されたこと、すぐれた絵図師が参画したことなどを指摘しうる。

清代の文書史料がほとんどうしなわれた外モンゴル西部のザサグト・ハン・アイマグの政治史、経済史、文化史、社会史の基本的な資料として、また美術史の資料としても本地図が今後活用されるであろうことはうたがいない。

(付記)

本稿は、科学研究費補助金 基盤研究 (C) 「モンゴルにおける地図作成とガバナンス」(課題番号 24520724、代表: 二木博史) による研究成果の一部である。

注

- 1) Ravdan 2008 : 244.
- 2) http://crossasia.org/digital/mongolische-karten/index/imgview/img/SBB-IIIIE_Hs_or_0162
- 3) Heissig 1961: 357-358. Heissig 1978: Faltafel 1.
- 4) 二木 2009: 30. 烏雲畢力格 2014: 86-87, 232-243.
- 5) ネット上に公開されているこれらの地図の説明が、「言語: 漢語」となっているのは、適切ではない。タイトルは漢語だが、地名、人名はモンゴル語と漢語で記録されている。
- 6) 二木 2009: 30-31. 烏雲畢力格 2014: 88-99, 244-257.
- 7) ソノムダグワが Agvangčerin を Navangčerin と誤記したため (Sonomdagva 1998: 284)、他のいくつかの文献でも Navangčerin となっているが、Zasagt khan aimgin chukhal khergin dans などの史料 (Dashnyam, G. et al. 2002) から、Agvangčerin がたがしいのは明白である。
- 8) Sügsürün のなまえは、Sonomdagva 1998 には記載されておらず、左翼後旗の第 10 代のザサグとして Günsensüren (在位 1901-1921) のなまえをあげている (Sonomdagva 1998: 269)。他方、包桂芹は 10 代めのザサグとして 苏克苏伦 (在位 1897 -) をあげるのみで、Günsensüren のなまえはない (Bao Guiqin 1995: 672)。Sügsürün は光緒 33 年地図になまえが記録されているので、当時ザサグだったことは確実である。Sonomdagva のリストは完全ではないとおもわれる。Günsensüren は 11 代めのザサグか？

- 9) モンゴル国立図書館：885/96. なおこの地図には、もともとはタイトルがなかったようだが、あとで *Ĵasaytu qan ayimay-un Čoytai jasay-un qosiyun-u nutuy-un jiruy* という表題がかきこまれた。このかきこみが清代ではなく、1911年のモンゴル独立後になされたことは、*Čoytai jasay-un qosiyun* という名称からしることができる。
- 10) モンゴルの地図・地名の研究の国際シンポジウムにおける Ts. シャグダルスレンの報告。2014年8月21日。
- 11) Chuluun 2014: 115.
- 12) Ravdan 2008: 244.
- 13) 上村明 2014: 246-247.
- 14) 周涛 2011: 66.
- 15) Ulsyn geodezi, zurag zuin gazar 1986: 15.
- 16) 崑岡等 1899.
- 17) 上海大学法学院 1998: 261.
- 18) ハルハにおくられた「画図各式」は、Kamimura 2012: 15 参照。
- 19) Shagdarširen 2012: 47.
- 20) モンゴルの地図における「視点」については、以下も参照。Kamimura 2005: 18-19.
- 21) Kozlov, P. K. 1905: 61-62.
- 22) Simukov, A. D. 2007: 325-326.
- 23) Pürev, O. 2004: 116-117.
- 24) 前近代のモンゴルの農業史については、小長谷 2010: 30-40 参照。
- 25) Banzragch, Sainkhüü 2004: 160, 378. Tsedendamba 2009: 261-262.
- 26) Banzragch, Sainkhüü 2004: 165-166, 386-387. Tsedendamba 2009: 481.
- 27) Altanzayaa 2012: 72
- 28) ナラントヤーほか（編）2011: 27.

文献一覧

1. 史料

Dashnyam, G. et al. 2002

Zasagt khan aimgiin chukhal khergiin dans, Ulaanbaatar.

Heissig, Walther 1978

Mongolische Ortsnamen, Teil II, Wiesbaden.

Ĵasaytu qan ayimay-un arban yisün jasay qosiyu, yurban qutuytu-yin šabinar-un egüride nutuy-laqu nutuy-un jiruy

Badarayultu törö-yin arban doloduyar on dörbedüger sarayin arban qoyar. Ms. (個人所有)

Ĵasaytu qan ayimay-un Čoytai jasay-un qosiyun-u nutuy-un jiruy

Badarayultu törö-yin yučin yurbaduyar on. Ms. モンゴル国立図書館：885/96.

崑岡 (Kun Gang) 等 1899

『欽定大清會典圖』

上海大学法学院 1998

『钦定理藩部则例』天津古籍出版社。

烏雲畢力格 2014

『蒙古遊牧圖：日本天理圖書館所藏手繪蒙古遊牧圖及研究』北京大學出版社。

2. 研究文献

Altanzayaa, L. 2012

“Mongolyn zarim tamgatai khutagtyn shavi naryn nutgiin zurgiin asuudald,” Futaki Hiroshi et al. (eds.), *Mongol orny gazryn zurag bolon gazar nutgiin neriin sudalgaany asuudluud*, Ulaanbaatar.

Banzragch, Ch., Sainkhuu, B. 2004

Mongolyn khüree khiidiin tüükh, Ulaanbaatar.

包桂芹 (Bao Guiqin) 1995

『清代蒙古官吏伝』民族出版社.

Chuluun, Kh. S. (ed.) 2014

Mongolchuud: XVII-XX zuuny ekhen, zuragt tüükh, Ulaanbaatar.

二木博史 2009

「天理図書館所蔵のモンゴル地図コレクションについて」今西淳子ほか編『北アジアの新しい秩序を探る』風響社.

Haltod, Magadbürin 1966

Mongolische Ortsnamen aus Mongolischen Manuskript-Karten, Wiesbaden.

Heissig, Walther 1961

Mongolische Handschriften, Blockdrucke, Landkarten, Wiesbaden.

Inoue, Osamu 2012

“Old maps showing Erdene Zuu Monastery from the private archive of Prof. W. Kotwicz,” Jerzy Tulisow et al (eds.), *In the Heart of Mongolia, 100th Anniversary of W. Kotwicz's Expedition to Mongolia in 1912, Studies and Selected Source Materials*, Cracow.

Kamimura, Akira 2005

“A preliminary analysis of old Mongolian manuscript maps: towards an understanding of the Mongols' perception of landscape,” Futaki Hiroshi and Kamimura Akira (eds.), *Landscapes Reflected in Old Mongolian Maps*, Tokyo.

上村明 2012

「地図の描き方と統治の手法——モンゴルの古地図をめぐる」吉田ゆり子ほか編『画像史料論 世界史の読み方』東京外国語大学出版会.

小長谷有紀 2010

「モンゴルにおける農業開発史——開発と保全の均衡を求めて」『国立民族学博物館研究報告』35(1).

Kozlov, P. K. 1905

Mongoliia i Kam: Trudy ekspeditsii Imperatorskogo Russkogo Geograficheskogo Obshchestva, sovershchennoj v 1899- 1902 gg. pri rukovodstvom P. K. Kozlova, Tom I, S.Peterburg.

ナラントヤーほか (編) 2011

『モンゴル国立図書館所蔵モンゴル語マニュスクリプト目録』早稲田大学モンゴル研究所.

Pürev, O. 2004

Mongol ulsyn tüükhen gazarzui (1911-1931 on), Ulaanbaatar.

Ravdan, E. 2008

Mongol orny gazar nutgiin nerzui, Ulaanbaatar.

Shagdarüren, Ts. 2012

“Mongolchuudyn gazryn zurgiin ulamjlal, tüüniig sudalsan toim, ür dün,” Futaki Hiroshi et al. (eds.), *Mongol orny gazryn zurag bolon gazar nutgiin neriin sudalgaany asuudluud*, Ulaanbaatar.

Simukov, A. D. 2007

“Geograficheskij ocherk Mongol'skoj Narodnoj Respubliki,” Yuki Konagaya et. al. (eds.), *Trudy o Mongolii i dia Mongolii*, Tom 1, Osaka.

Sonomdagva, Ts. 1998

Mongol ulsyn zasag, zakhirgaany zokhion baiguulaltyn öөрчлөлт, shinechlelt (1691-1997), Ulaanbaatar.

Tsedendamba, S. 2009

Mongolyn сüm khiidiin түүкhen товчоон, Ulaanbaatar.

Ulsyn geodezi, zurag zuin gazar 1986

Mongol ulsyn aimag, khyazgaar, kharuulyn nutgiin zuragt alibom, Ulaanbaatar.

周涛 (Zhou Tao) 2011

『中华舆图志』中国地图出版社.



A. ザサグト・ハン・アイマク地図 (光緒 17 年)



B. 同地図の一部 (ザサグト・ハン旗、左翼後旗など)

On the newly discovered manuscript map of the Zasagt khan aimag drawn in 1891 – a typical map of Khalkha Mongolia's aimag made in the Qing dynasty

FUTAKI Hiroshi

The newly discovered manuscript map of the Zasagt khan aimag of Outer Mongolia in the possession of a private collection was drawn in the seventeenth year of Emperor Guangxu or in 1891. The map was prepared for the compilation of the Daqing Huidiantu or Illustrations for the Assembled Canon of the Great Qing.

As most archival records of the aimag belonging to the Qing period were lost, the map is valuable and useful for the reconstruction of the history of the area. The map should be regarded far more important than previously known map of the same aimag drawn in 1908.

First, the number of place-names recorded in the 1891 map is about three times as the Zasagt khan aimag's map of 1908.

Second, traditional Mongolian perception of landscapes is reflected in the 1891 map.

Third, names and whereabouts of Buddhist monasteries are recorded in the map in detail.

Fourth, Cultivated land including fields for sustaining poor Mongolians are shown in the map.